

講義 日本文学

〈共同性〉からの視界

New!
2021年
3月26日
刊行

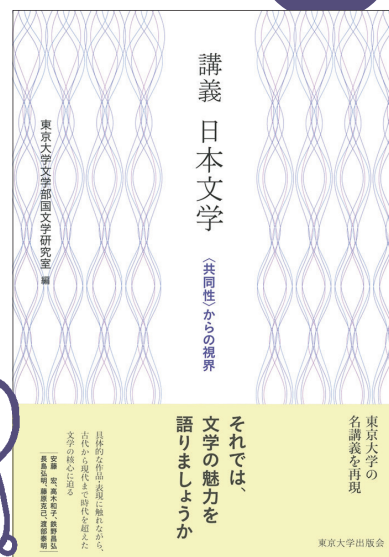
東京大学文学部国文学研究室 ― [編]

日本文学とは何か、その大きな特徴を古代から近代まで時代を超えて明らかにする東大文学部の講義。巨大な知が集結した源氏物語の作者は本当に一人なのか。万葉集の歌から、中世の和歌、近世の俳諧と限られた文字による表現の真髄、文壇が近代に作りだしたものは何か、文学の核心に迫る。

A5判／256頁／定価2,970円(本体2,700円+税)
ISBN978-4-13-082046-2

東京大学の
名講義を再現!!

東京大学出版会
営業局キャラクター
くまきち



【主要目次】

はじめに―なぜ〈共同性〉を問題にするのか (渡部泰明)

I 作者はどこにいるか

- 第1講 歌謡の仕組み―雄略記を読む① (鉄野昌弘)
- 第2講 紫式部の孤心―『紫式部日記』を読む (藤原克己)
- 第3講 作者は一人か―和歌や物語の制作の場 (高木和子)
- 第4講 個性が生まれるとき―西行と藤原俊成 (渡部泰明)

II 読者との往還

- 第5講 源氏物語と漢文学
―漢詩文の引用と〈共同性〉 (藤原克己)
- 第6講 平安時代の和歌―言葉と〈共同性〉 (高木和子)
- 第7講 浪人の連帯感
―『西鶴諸国ばなし』に見る〈共同性〉 (長島弘明)
- 第8講 テキストの中の“文壇”
―近代文学の〈共同性〉 (安藤 宏)

III 創出される〈共同性〉

- 第9講 歌うことと書くこと―雄略記を読む② (鉄野昌弘)
- 第10講 無常観が生みだすもの―方丈記と徒然草 (渡部泰明)
- 第11講 「座」から切り離された発句
―『奥の細道』と連句の〈共同性〉 (長島弘明)
- 第12講 演技する「小説家」
―志賀直哉『城の崎にて』を中心に (安藤 宏)

総合討議 日本文学と〈共同性〉
(渡部泰明・安藤 宏・長島弘明・藤原克己・高木和子・鉄野昌弘)

あとがき (長島弘明)

【注文書】

貴店名・番線	講義 日本文学 〈共同性〉からの視界 A5判／256頁／定価2,970円(本体2,700円+税) ISBN978-4-13-082046-2	〔ご注文数〕 冊
	お名前	お電話番号
	ご住所 〒	

平安朝文人論

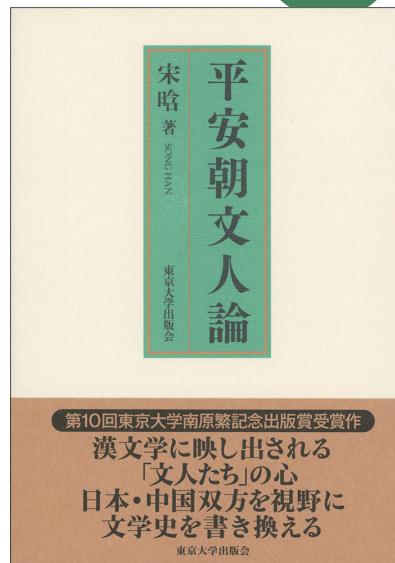
New!
2021年
4月2日
刊行

宋 吟 (フェリス女学院大学文学部准教授) —— [著]

平安朝では漢文による公文書の書記が文人たちの素養とされるなかで私的な内面を表現する文学的営為が展開した。本書は、文章経国思想のもと嵯峨朝から漢文学が解体する院政期を対象に、中国文学と日本文学の双方を大局的にとらえ、漢文脈によって形成される精神とその発露を捉えかえす。

A5判／362頁／定価5,940円(本体5,400円+税)
ISBN978-4-13-086062-8

第10回
東京大学南原繁
記念出版賞受賞作!! /



【主要目次】

- 序 平安朝漢文学と文人
- 第一部 文人意識の端緒
 - 第一章 嵯峨朝における文章と経国——漢文芸の二重の価値
 - 第二章 嵯峨朝詩壇と個人の文学
 - 第三章 菅原清公の「嘯賦」——趣味の意義
 - 第四章 平安朝漢詩の変貌
- 第二部 九・十世紀交替期の文人と散文の個人化
 - 第一章 都良香の散文における新動向
 - 第二章 菅原道真の憂悶——閑居文学の変奏
 - 第三章 紀長谷雄の自伝
 - 第四章 平安朝散文史における九・十世紀漢文の意義
 - 第五章 和漢の散文の交渉
- 第三部 平安朝中後期漢文学における定型性と固有性
 - 第一章 兼明親王の文学——孤高と閑適
 - 第二章 慶滋保胤「池亭記」のスタイル——思考の理路
 - 付論 慶滋保胤の詩序における「池上篇」受容
 - 第三章 大江匡衡と八月十五夜——都と辺土
 - 付論 平安朝における駢文と散文の連関
 - 第四章 大江匡房の文業
- 終章 平安朝文人の文学

【注文書】

貴店名・番線	<h3>平安朝文人論</h3> A5判／362頁／定価5,940円(本体5,400円+税) ISBN978-4-13-086062-8	(ご注文数) 冊
お名前	お電話番号	
ご住所 〒		